

Title	古代中國の季節祭と傳説との關係
Sub Title	On the relations between mythological traditions and seasonal rites in ancient China
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1953
Jtitle	史学 Vol.27, No.1 (1953. 12) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19531200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代中國の季節祭と傳説との關係

松 本 信 廣

中國古代の王者が、その不徳失政の爲没落したといふ物語は、古文獻の中に屢々見ゆる所であるが、その所傳が、どこまで史實であり、或はどこまで單なる架空の物語に過ぎぬか、また後者の場合どこまで外部から流入した説話型から發展したものであるか、また古代の儀禮の根迹を止むる神話的傳承の類から生れてきたものであるか充分検討する必要がある。何人も氣づく所であるが夏朝の最後の王たる桀と殷朝の最後の王たる紂の没落傳説とは殆どその趣向が、同一である。即ち桀は、妹喜と云ふ美女を寵愛して日夜酒宴に耽り、忠臣の諫めを用ひず却つて之を殺し、奢侈を極めたとされ、紂は妲己と云ふ美女を嬖愛し、酒池肉林の歡を恣まにし、忠臣の諫言を用ひず、豪華に耽つたと云はれてをる。何人にも此兩傳説が、大體同一の筋を基とし、夏朝と殷朝との没落と云ふ二つの場合に分れて形成された物語である事に氣づくであらう。更に王者没落傳説の一例として擧げられるのは殷の武乙の物語であり、史記殷本紀中に「帝武乙無道、偶人を爲り、之を天神と謂ひ、之と博し、人をして行はしめ、天神勝たざれば、乃ち之をはづかしむ。革囊を爲り、血を盛り、仰いで、之を射、命じて射天と曰ふ。武乙河渭の間に獵し、暴雷あり、武乙震死す」とある。これと類型の物語は、殷の子孫たる宋の國家の最後の君偃に就ても傳へられてをる。即ち史記宋微子世家に、「君偃十一年、自立

して王と爲る。東齊を敗り、五城を取り、南楚を敗り、地三百里を取り、西魏軍を敗る。則ち齊魏と敵國と爲り、血を盛るに韋囊を以てし、懸けて之を射る。命じて射天と曰ふ。酒婦人に淫す。羣臣諫むる者あらば、輒ち之を射る。是に於て諸侯皆桀宋と曰ひ、宋それ復紂の爲す所を爲す。誅せざるべからずと。齊に告げて宋を伐つ。帝偃立ちて四十七年、齊の潛王魏楚と宋を伐ち、遂に宋を滅して其地を三分す」とあり、戰國策の宋策にも「君偃……霸の速かに成らんことを欲し、故に天を射、地を笞ち、社稷を斬り、之を焚滅し、天下鬼神を威服すと曰ふ云々」とある。

此話が、西方の物語と類型である事は、既に古く佛の Darmesteter が指摘し、此中國の傳説が、ペルシアに流入し、更に同地よりアラビア人、スペインのユダヤ人に借用され、ネムロッド王が、天に向つて弓を射、返し矢が血にまみれて落ちてくる物語となつたと云ふ意見を述べたが (J. Darmesteter, *La fêche de Nemrod en Perse et en Chine* [Journal Asiatique, fév.-mars-avril 1885, p. 221—228], E. Chavannes, *Les Mémoires historiques de Se-ma Tsien*, Tome I, Paris, 1895. No. 2. p. 198.) アンリ・マスペロ教授は、逆に西方の物語が、戰國時代に中央アジアの東西交通が盛んになつた爲、中國に流入し、武乙の傳説になつたのであると云ふ意見を公けにした。(先秦時代の支那に於ける西方文明の影響「史學雜誌」四十編一八頁昭和四年八月)⁽¹⁾ 然し天神を偶人で象徴して之と博したとか、韋囊に血を盛つて射ると云ふ逸話の如きは、決して西方の當該説話中に見うけず、反對に天を射た返し矢が血にまみれ、之によつて殺される筋の如きは我國の記紀物語中に見ゆる天若日子説話中にも見え、必ずしも西方起源たることを要しない。古く十日を射た羿の古傳説あり、また日食の場合矢を放つて之を救ふ例あり (周禮秋官庭氏)、射禮が諸侯卿大夫士を選ぶ場合にその資格檢定の重要な役割を演じ (禮記射義)、男子が生れた場合桑弧蓬矢六で天を射、地を射、四方を射たと云ふ (同) 傳

承の存在することは、天を射る傳説の充分中國に於て獨自に發生なし得る可能性あることを示すものと云はねばならぬ。

君偃が、地を管つたと云ふのは、中國に於て土牛を鞭ち、之を鞭春と名づけ、地の精力を脅かして之に速かなる回春を強ふる立春の行事を想起せしむるものであり、社稷を斬り、之を焚滅したと云ふ挿話の如きは土地の象徴たる樹木が斬られ、焚滅せられることによつて地が懲罰せられ、その靈力の徹底的な振起が促されることであり、季節祭に於ける儀式意圖との相關を類推せしむるものあり、武乙が天神と博すと云ふ挿話に見られる「賭博」の如きも恐らく季節祭に伴ふ神意を下ふ宗教的行事の根迹なるべく (S. Hartland, Games, J. L. Paton, Gambling [J. Hastings, Encyclopaedia of Religion and Ethics Vol. VI. p. 163—171.] 武乙の射た革囊は、季節祭に行はれる競技の際用ひられるボールの類と關聯あるものではないかと推せられる。中國の王者没落傳説は、單なる説話的類型に基いて説明される以外にその個々の挿話的分子に一々の儀式的緣由を尋ねる必要ありと云はねばならぬ。同じことは西周の終末の幽王の没落傳説に就ても云はれるのであつて、此説話の大體の骨子は次の如くである。

「周の宣王の時童謡あり、山桑の弓と箕の草で作つたやなぐひとが、周國を亡ぼすであらう」と。宣王は之を聞き、夫婦の是器をひさぐものあるを執へて之を罪し、路にさらしものとした。丁度宮中の小妾が、王胤に非ざる女兒を生み、懼れて之を棄てた所、夫婦はその夜啼くを哀れみ、收めて以て褒の國に奔つた。褒の國で周室に對し罪あり、童妾の棄てた女子を王に入れて罪を贖つた。此童妾の生んだ子と之ふのは次の如き來歴のものである。昔夏の衰へた時、褒人の神化して二龍と爲り、王庭にあつまり、余は褒の二君であると云ふ。夏后氏が之を殺すと之を去ると之を止むるとを卜

したが何れも吉でない。そこで其^ア祭を請ふて之を藏せんことを卜するに吉と出た。乃ち幣を布き、策して之を告げると龍は亡けて祭だけが残つてをる。積の中に之を入れて藏し、代々之を郊で祭つた。殷周時代に及び、之をあけるものがないかつたが厲王の末に及び、開いて之を觀ると祭が庭に流れて除くことが出来ぬ。王婦人をして裸にして群呼せしめた。すると祭が化して玄龜となり、以て王府の中に入り、府の童妾の未だ齒が抜け變らざるものが之にあひ、既に筭して孕み、宜王の時に當つて子を生んだ。夫なくして育てたが懼れて遂に之を道に棄てた所先の夫婦の者が拾得したのである。幽王は、之を愛し、伯服を生む。そして正妃の申后を廢し、太子の宜臼を去り、褒姒の子伯服をして之に代らしめた。褒姒は、笑を好まず、幽王はその笑ひを欲し、いろいろ方法を盡したがどうしても成功しない。幽王時に烽火大鼓を作り、寇の至るあらば、則ち烽火を擧げることとなつてゐたのに寇無きに拘らず烽火を擧げた。すると諸侯悉く至り、至れば寇なく、褒姒は之を見て大いに笑つた。幽王、褒姒の笑ひを見て頗る説^{よろこ}び、ためにしばしば烽火を擧げたので其後諸侯之を信ぜず、烽火のあがるを見ても誰も都にあつまらぬ。先に廢された申后の父申侯が、西夷犬戎と結び、幽王を攻めるに及び、幽王驚いて烽火を擧げ、兵をめしたが諸侯至るものなく、遂に驪山の下で殺され、褒姒は、虜となつたと云ふ筋である。(史記周本紀、國語鄭語(前半のみ)、呂氏春秋疑似篇)

寇無きに擧げた烽火にあざむかれた諸侯達が、烽火の警報を信じなくなり、後に犬戎の侵寇を受けた際一人として烽火に應ずるものなく、遂に王が滅されるに至つた物語の筋は、イソップの寓話に見ゆる「狼來る」と云ふ警報に度々村人をあざむいた羊飼ひが、實際狼の襲來した場合に誰も救援者無く食ひ殺された型の傳説と歸を一にしてをるのである。かういふ世界流布説話が中國に流入して此物語の因素となつたと考へられるけれども、褒姒傳説の中に盛られた他の様

々な挿話、例へば龍の磔の化身たる美女が王没落の原因となつたり、山桑の弓や箕のやなぐひが周を亡す豫兆になつたりすることは、全く中國説話にしか見られぬ特色で、中國古代社會に於ける季節的祭儀を中心とした記憶が、かゝる祭儀の關係者たる王者没落傳説の上に反映したものと見なければ解釋せられ難いものである。

自分が此處に主として取扱ひたいのは、何故に烽火が王者没落の機縁になるかと云ふことである。これは中國に於て冬と春との交代期に王者が火をたく儀式と密接な關聯を持つてゐたことと照し合せて考へる必要があると思ふ。禮記の郊特性その他によると周の天子は冬至に南郊の圓丘に於て天を祭り、之を郊と呼び、その祭りの方法は、燔柴であり、火をたいて煙を天に達せしめたと云はれてゐる。王と云ふ字の金文が火に従ふのも王が火の祭祀を司つたからであると云はれ、殷の天子は神主であり、年を記録するに祀を用ひたのは一年一回の大祭即ち冬至頃の祭より起つたのであらうと云はれてゐる。(内藤博士、「支那上古史」八二頁)火を焚く事は古代中國に於ける祭儀の一形式であり、燎と云ふ名によつても呼ばれてゐた。祭の對象が天空にある神として考へられた場合、これに對する供御の品々を火に焼いてその煙を天に達せしめ、之によつて祭物を天に達せしむる一手段と考へる場合があつたらう。然しこの火祭の目的は、最初に於ては決して單一なるものでなく、種々なる複合要素から成立したものと考へることが出来る。冬至の日は、此日を限りとして漸く日が長くなるのであり、従つて郊の祭の目的を「長日の至るを迎ふるなり」(郊特性)と云ふ風に解釋し、「大いに天に報じ、而して日を主とし配するに月を以てす」(祭義)と云ふ様に太陽の祭祀の意味をつけ加へて説明することが出来るのである。多くの民族にあつては、太陽の運行に應じて地上に火を焚く風習がある。ヨーロッパの田舎では夏至に聖ヨハネの祭を営み、火を大いに焚き、人々香草を手にして其上を飛び越える。之に似た風習は、インド、アフ

リカでも行はれる。また冬至にも同じく火を焚き、又は點す風ヨーロッパに行はれ、降誕祭や主顯節の風俗はキリスト教が異教のそれに習合したのだと云はれてをる。その外冬至に火を點する風は、エジプト、ギリシア、ローマ、ヘブライ等に見受けられる。(Frazer, *The Golden Bough*, Balder the Beautiful, Vol. I. London, 1913, p. 106—346, Groot,

Les Fêtes annuelles célébrées à Emoui, Tome I, p. 136—139, p. 278—280.) 中國の君主が郊祭に柴を焚いた理由の一つには日の活力を増さんとする呪術的意味があつたと見ることが出来る。しかしそれが全部ではな
50

禮記明堂位には「帝を郊に祀り、配するに后稷を以てす」と云ひ、同じく祭法には有虞氏、魯を郊し、夏后氏魴を郊し、殷人冥を郊し、周人后稷を郊すとある。郊の祭は、天を祭ると云ひながら、それに配して各王朝特定の祖先も祀られるのである。しかも夏の郊に祭つたと云ふ魴は、その名は大魚の稱呼と關係あり、洪水を治めんとして成らず、羽山に極され、その靈水に入り、黃熊又は黃能となつたと傳へられ、殷の郊に祭つたと云ふ冥は、殷の祖先の一人で同じく水死すと傳へられ、その名は、幽、夜、死者と關聯を持ち、また周の郊祀したと云ふ后稷は、穀物の神たるのみならず、山海經二、西山經によると槐江の山の條に「西大澤を望む、后稷の潜る所也」とあり、郭註に「后稷生れて靈知、其の終るに及び、形化し此澤に遯れ、之が神となる」とあり、水澤と關係を持つてをる。また褒姒傳説に従へば、夏、殷、周の各朝は褒人の神の化した龍の漿を入れた積を、郊に祭つたと云ふのである。斯く郊祭は、太陽の様な陽性の神靈のみならず、水や澤の如き陰性の神靈とも交渉を持つてをることが推察せられるのである。

冬は太陽の力が、最も薄き時であると共に中國北方に於ては水の乏しくなる時である。來るべき歳が、豊饒ならんが

爲には水の潤澤が、保證せられなくてはならぬ。郊の祭には陽性なる天や日が祀られたのみならず、陰性なる水の神靈を對象とする儀式を伴ふたことが想定せられる。

周代には雨乞の儀式は、雩と云はれ、巫が舞をなして雨を請ふたのである。遡つて殷代に至ると巫が雨を請ふため舞をなしたことは周代と變らぬが、その外「爇」と呼ばれ、殷虚書契前篇五卷十三枚に「貞爇奴之从雨」とある如く奴隸を犠牲として火に炙り、もつて雨を祈る儀式が存在したらしい。この爇は説文解字に「交木然也」とあるものであり、木を交えて燃すと云ふ形式に於てまたその名稱に於て周の郊祭と相類似せるものである。たゞ殷の爇は雨を請ふのが目的であり、此點天を祭ると云ふ郊祭と表面上異なる如く思はれるが、然し前述の如く郊の目的もなかなか複雑で之を單純に天や太陽の祭として片附けるわけにはゆかぬ。其年の水豊かなるを祈ることもその目的の一であつたのである。(葉玉森、堊契枝譚八、郭沫若、殷契叢編九一枚)

殷代の爇祭の根迹は、後世の傳承にもその余韻を傳えてゐる。檀弓下によると早の場合、祭祀に従事する巫尪を暴し、雨を得んとしたのであり、それに對し、臣下が君侯自ら身を責め、崩御した場合の市を徙す儀式を行ふことをすゝめてゐるのである。即ち「歳旱す、穆公縣子を召して問うて然して曰く、天久しく雨ふらず、吾尪を暴さんと欲す。奚若」と、曰く天は則ち雨ふらず、而るに人の鋼疾の子を暴すは虐なり、乃ち可なるなからんかと。然らば則ち吾巫を暴さんと欲す。奚若と、曰く、天は則ち雨降らず、而るに之を愚婦人に望む、以て之を求むるに於て乃ち已だ疏なるなからんかと、市を徙さば則ち奚若と、曰く天子崩すれば巷に市すること七日、諸侯薨すれば巷に市すること三日、之が爲に市を徙さば可ならずや」と。之と相似た傳説は、左傳僖公二十一年の條にも見えてをる。「夏大いに旱す、公巫尪を焚かん

と欲す。藏文仲曰く、旱の備に非る也、城郭を修め、食を賤し、用を省き、穡を務め、分を勸む。此れ其の務なり、巫
尙何をか爲さん、天之を殺さんと欲せば、則ち生ること勿きに如んや、若し能く旱を爲さば、之を焚けば滋甚しからん、
公之に従ふ、是歳や、饑れども害せず」とあり、杜預は、註して「巫尙は女巫也、祈禱して雨を請ふを主る者、或はお
もへらく尙は巫に非る也、瘠病の人、その面上に向へり、俗に謂ふ、天その病を哀み、雨其鼻に入るを恐る、故に之が
爲に早すと、是を以て公之を焚かんと欲す」とある。「尙の不具なるが爲天その鼻に雨の入らざらんが爲早す」と云ふの
は當時の俗説に過ぎず、婦人とか身醜尙弱なるものが、特に神に仕え、雨を請ふ祭儀に従事してゐたのであり、之を焚
かんとしたのは矢張りこの祭儀の責任者を懲し、雨を來さんとしたものなるべく、臣下が之に對し、寧ろ君侯の自ら罪
することをすゝめたのは前例と同様、大旱の責任者が、専門化した祭祀者よりも自然の運行に責任を持つ祭祀的君侯に
ありと云ふ古代觀念の殘存を類推せしむるものではなからうか。穆公の場合市を徙すと云ふ喪禮に従つたのは、實に君
侯が死をもつて責任を負ふことを意味するものであらう。

呂氏春秋卷九には次の傳説が見える。「天大いに旱し、五年收めず、湯乃ち身を以て桑林に禱つて曰く、余一人罪あり、
萬夫に及ぶなし、萬夫罪あるは余一人にあり、一人の不敏を以て上帝鬼神をして民の命を傷けしむるなかれ、是に
於て其髮を翦り、其手を磨き身を以て犠牲となし、もつて福を上帝に祈る、民乃ち甚だ説び、雨乃ち大いに至れり云々。

(參照淮南子十九)

殷代に於ける雨乞の儀式に奴隸を以て犠牲にするのはごく當初に祭祀者自身を犠牲にした習俗が次第に緩和され、身
代りとして奴隸を犠牲にすることに變つたものであるかも知れぬ。そして古代の祭政一致の社會に於てその祭祀者は王

自身が之を兼ねてゐたこともあつたであらう。したがつて王が犠牲となつた場合がなかつたとは云へぬ。文獻時代には既に中國は文化極めて進んでをり、かような未開状態の存在してゐたことを文獻で證明することは難かしいが、その周圍に居住してゐた比較的未開な國々に残れる慣習がそれを類推せしめるたよりとなる。たとへば魏志夫余傳に「舊夫余の俗水旱調せず、五穀熟せざれば、輒ち咎を王に歸す、或は言ふ、當に易るべしと、或は言ふ、當に殺すべし」と。則ち巫祝的王が自然の運行の責任を負ふてゐた譯である。

郊祭は他の解釋によると冬至でなく孟春の月に比定されてをる。月令、孟春の月の條に、「是月や天子乃ち元日を以て穀を上帝に祈る」とあり、鄭注に「上辛を以て天を郊祭するを謂ふ也」と云つてをる。そして郊祭の後更に吉日を選み、天子は自ら民に先立つて農事を行ふ藉田の式を行ふことを説いてをる。此王者親耕の風習は、最近まで中國人と縁族なるタイ人の間にも行はれてをり、此處では農業大臣が春人民に代つて先づ耕作を行ふ儀式を行つたが、テュルパンの十八世紀に於ける記述によると、大臣でなく王が代つて此任務を遂行したのであり(M. Turpin, Histoire civile et naturelle du Royaume de Siam, Paris, 1771, p. 37.) 十九世紀の中葉のパレゴアの記述によると、その祭の間三日間假の王を選び、之が在任間勝手放題の眞似をなすことが許され、その間眞物の王は宮殿内に隠れてをる。そしてこの假の王が親耕の儀式をなすと共に、木の幹によりかゝり、隻脚で立つと記され(M. Pallegoix, Description du Royaume Tai ou Siam, Tome 1, 1854, Paris, p. 250.) 最後に此王の死刑執行の眞似事がなされる。(Moret, Mystère Egyptiens, 1923, Paris, p. 231.) かういふ春の祭に於ける假の王の奉戴とその處刑は、各國の民俗に屢々見る所であり、來ん年の收獲を保證する爲祭祀的の王を犠牲にする行事が次第に變形し、その悲惨なる運命は、特に選ばれた代理者に移向し、

或は單なる人形によつて代行したものであらうといふことは、フレーザーの大著「金枝篇」The Golden Bough が世界各國の資料をあつめて論證した所である。中國に於てもかういふ古代の季節祭の記憶が古代の王者没落傳説中に根迹を残してをることは否み得ない事實である。

桀とか紂とか幽王と云ふ王様は、何れも美女に迷つて没落するのであるが、此女性の性質は、當初に於て必ずしも物語の意味するが如きものでなかつたらしい。たとへば褒姒と云ふ女を生んだ精靈は、龍の精靈であり、初めは積に入れられ、郊に祭られ、後玄龜と化したと云はれ、水と縁故あるものである。これから生れた女子、褒姒が水の精靈と多分の交渉を有することは疑ひない。周代に於ては「龍見えて雩す」と云ひ、四月龍星のあらはれる時雨乞ひするのであるが、その祭には女巫が舞をなし、吁嗟長嘆して雨を乞ふたのである。古代王者没落傳説に於て王者と對象的位置に立つ女人は、水の神や大地に仕ふる女性の巫祝の印象を止むるものではなからうか。褒姒傳説に於て龍の精靈が積から溢れ出でた時王が、婦人をして裸して群呼せしめたといふ記事は、紂や桀の傳説に出てくる「酒池肉林男女裸して相逐ふ」の逸話と共に冬の祭に於ける巫祝が、肉體をあらはして不妊の大地に生産を促す淫りがまじき行事の存在を推知せしむるものではなからうか。冬は、女なる大地が、不妊となり、食物を供給をやめたと考へ、之をして生産への欲望をそよるため身體をあらはにした舞踊、その他の呪術的行爲が必要とされてゐたのである。その一面冬の不妊は、大地の女神が、怒つてその口をとぎした爲であると解せられ、その女神を笑はせるため、笑ひの行事が必要とされてゐたのである。かういふ實例としてギリシア神話に於ける、最愛の娘セレスを地獄の神プルトーに奪はれ、憂ひに沈める大地の母神デメテルの前行はれた巫女パウポの裸身顯露のみだりがまじき踊や、我國神話に於ける天岩戸の前で八百萬の神を初め天照

大御神を笑はしめた天鈿女の命の裸舞が擧げられる。笑はざる女褒姒の前に行はれた燧燧物語は、單なる説話の一挿話としてでなく、冬から春にかけて行はれた季節祭に於ける水や大地の精靈を代表する女巫の前に行はれた笑ひの儀式、及び同時に行はれた火を焚く儀禮の印象を止めたものと見るべきではなからうか。かういふ季節祭に火を焚くのは、寒氣や早や饑饉の惡靈を逐ふ一種の祓除的行爲であつたと云へる。従つて陽性なる太陽、光明、溫暖は、陰性なる濕潤、水、大地と共に一様に此祭の祈求する對象となつてをつたのである。即ちかういふ祭の生れたのは陰陽と云ふ様な智識階級の考へ方の成立しない遙か以前からであつたと云へる。

燧燧は、戰國時代あたりより行はれた火による信號であり、史記周本紀正義によると烽は土櫓なり、燧は炬火なりとあり、史記七七卷信陵君無忌傳集解、前漢書四十八卷、賈誼傳顏氏註に引かれた文穎の説は、高土櫓を作り、櫓上桔槔を作る。桔槔は「兜零」を頭とし、薪をもつて其中に置く、常は之を低くし、寇あれば即ち火燃し、之を擧げ、以て相告ぐ、(之を) 烽と曰ふ、又多く薪を積み、寇至れば即ち之を燃し、以て其煙を望む、(之を) 燧と曰ふと述べてをる。

藤田豊八博士は、説文解字の燧とはもと燧火の擧げられる塞上の亭の義であると云ふ説を引き、烽とは烽火そのものを指し、燧とは燧火の擧げられた所を指したと解してをる。「燧燧につきて」劔峯遺草所收昭和五年) 最近勞幹は、燧燧出土文書により更に細密な議論を公けにしてをる。「釋漢代之亭障與烽」集刊十九、民國三十七年) 思ふに烽と燧との意義はその時々異なる意義が附加されてゐたことと思ふ。烽は突出せるものをあらはす原義から高土櫓その他を利用するシグナルを指し、ついで發火シグナルを指すようになったのであるまいか。木燧と云へば木製の發火器を意味し、金燧と云へば金屬製の凹面の反射鏡を意味し、遂は小溝を指し、隧は、地下道を指す所から考へると遂は初めくぼめるもの

又はくぼめる行爲を意味する原義から發火器を表はす語となり、更に發火シグナルの行はれる場所を指す語となつたのであるまいか。

兎に角或時期には烽の構造は、高い土櫓の上に桔槔をしつらへ、その先端に箕の如きものを結び、その中に薪草を置いて火を點じたものであつた、そしてかゝる形式の炬火はシグナル以外にも用ひられたのであり、呂氏春秋本味篇には「湯伊尹を得、爇するに燿火を以てす」の條に高注に「周禮司燿火の政令を掌り行ふ。火を燿するは其不祥を祓除する所以、火を桔槔に置き、燭してもつて之を照す、燿讀んで權衡の權と曰ふ」とあり、贊能篇にも大體同じことが注せられてゐる。即ち祓除を目的とし、桔槔に火を燭して照す風が存したことが推定される。また史記封禪書、漢書郊祀志にも「權火舉げて而して祠る」とあり、張晏注して「權火は烽火也、狀井の挈阜の如し、其法稱に類す、故に之を權火と謂ふ、光明を遠く照し、祀所に通ぜしめんと欲す」とある。しかれば祭儀に用ひられた庭燎の一種には桔槔を用ひて燈明を高く點する風があつたらしい。褒姒傳説の中にあらはれた烽燧は、寇を知らせるシグナルとみる外に火の祭儀の重要な一要素として時人の腦裏に印象づけられてゐたことを考へねばならぬ。

古代の「帝」と云ふ文字の象形は、天を禋祀する時の束薪若くは束薪を立てた形を解する説が有力であるが（たとへば市村瓚次郎博士「東洋史統」一卷一六一・七頁）之に對し小島祐馬博士は、「帝」字に火又は火焰に従ふものなきこと、帝字の柱中央部に臺の如きものが附加されてゐることを指摘し、之が「燎」字に見えざる所から、その説に疑をはさんでをられる。（「古代支那研究」九一―一三頁昭和十八年、弘文堂）

しかし「帝」字はたとへ帝を祭る燔祭そのものに直接關係なしとしても天を祭る高い架臺をあらはしてゐたと云ふこ

とが云へると思ふ。上部の底邊を上にした等邊三角形の如き象形は、天帝に對する獻物を置いた所と考へられ、民族は違ふが金朝の九月九日の郊祭で天を祭るに「木を刳つて槃となし、舟狀の如し、赤く質をなし、雲鶴文を畫く、架を爲り高さ五六尺盤を其上に置き食物を薦む」とある風が聯想される。問題となるのは交錯させた三本の柱の上に附加した横木狀又は臺狀の如きものであり、柱に對し接着點が一個所で極めて不安定なものであることが推測せられる。之はおそらく柱を貫き横に突出した板で、從來の人々の考えた如く束薪ではなく、寧ろ華表の如く、天上の靈の目を惹くよう色彩を施した布類でも結んであつた横木類かも知れぬ。かう考へれば「帝」字が火焰に従はずともよいわけになる。

また古代中國の季節祭に於て桔槔が柱に附隨して使用せられてゐたのではないかといふ疑ひもある。呂氏春秋過理篇に「紂が柱を彫り、諸侯を桔す」とあり、注に高柱を雕畫して桔槔を其端に施し、諸侯を擧げて之を上下せしむとある。祭に使用せられる柱に横木を桔槔式にしつらえ、祭儀的目的に供したことも推測せられるのである。

更に問題となるのは、紂の行つた悪行の一とされる炮烙又は炮格の形がある。史記殷本紀には「紂乃ち刑辟を重んじ炮格の法あり」と云ひ、列女傳には「銅柱に膏し、之に炭を加へ、罪ある者をして其上を行かしめ、すなはち炭中に墜つれば姐己乃ち笑ふ」とあり、呂氏春秋過理篇には「糟丘酒池肉圃格を爲る」とあり、注に、「格は銅をもつて之を爲り、火を其下に布き、人をもつて上に置く、人爛れて火に墜ち、死すれば之を笑つて以て樂となす」とある。

火の上をわたつて落ち死するを見て笑ふといふ挿話は、如何にも慘酷に感ぜられるが、正月十五日の夜に火を盛んに燃し、その祭の終りぎはに道士が白虎の小像をかゝえて火の上を跳び、續いて熱狂した會衆が、あらゆる偶像を手にし

て火を跳び、しそんじて火中に落つるものあれば笑はれる儀式が廈門で行はれてをる。(Groot, *Les Fêtes annuelles célébrées à Amoui*, Tome I, p. 134, 135.) またカルタゴ人は Moloch と云はれた太陽神の空ろの偶像に人間をさしつけ、この神像の兩腕は、その上に乗せた獻物が自然と偶像内に點ぜられた火の中にくらげ落ちるようにしつらはれ、犠牲を捧げた信者達は、像のまはりを踊りまはつて音楽を奏で叫び、焼け死ぬ犠牲者の聲を消してしまつたと云はれてをる。同じ太陽神を崇める爲にシリア人やアンモン人もその子供をして火をくぐらしめたのであり、ローマの近くのファリスに於てはヒルピアンとよばれた少數の家族あり、太陽神アポロを祭るためソラクトの山の上で催される祭に火わたり行事を行つたと云はれてをる。(ibid., p. 281—282.) この種の火の行事に似た風俗が悠遠の古へに於て北方シナにも冬の祭に行はれ、その印象が、炮烙の刑の傳説と交渉を持つてゐたと認むべきではなからうか。火の上を越ゆることが火の勢力によつて不祥を祓ふ意味があり、また神に領されたる者なることを證據だつる神判の意味のあること等が次第に忘れられ、之に火刑といふ一面のみを見、紂の悪事を誇張せんとし、炮烙傳説を生成したのであらう。

冬至後一百六日、清明節前二日に行はれる寒食の行事に火を禁じたのも古代の火に對する信仰に淵源したものと考へられるが、その行事の起源に傳會されてをる介子推焚死の傳説もその死様が「抱木而死」といふ特異な形式であり、傳説生成の背景として祭に際し火を焚き、それが人身供犠の記憶を伴つた社會の存在が推定されるのである。

冬から春にかけての祭に狂熱的の亂舞が行はれることは中國古代に於ては、歳末の蜡の祭が之を代表してをる。此祭に於ては萬物を合せ聚めて之を饗するのが目的であると云はれ、その中でも水や土を勞ふて送つたので「土その宅に反れ、水其壑に歸れ、昆蟲作ふことなかれ、艸木は其澤に歸れ」と云ふ唱へごとがなされたと云はれてをる。そしてその

祭に於て「一國の人皆狂するが如し」（禮記雜記）と云ふ狀景が演ぜられ、その際饗せられる神々は尸によつて代表せられてゐたと推せられる。その祭には狸を迎へ、虎を迎へて祭つたと云はれ、恐らくその神の尸となつたものは、假面を被つて神を装つてゐたものと推せられ一種のカーニバル祭の如き狀景であつたかと考へられる。神に出来る限りの接待をなし得たものは來年の豐饒を神から保證することが出来る。所謂「お返し」の義務が神に負はされた譯になるのである。従つて祭に於ては極めて豪華な饗宴が、神を代表する祭司達とその信徒との間に取り交されたのである。紂や桀の傳説に見ゆる酒池肉林の大振舞や、男女相逐ふが如き無禮講、長夜の飲、象箸の如き財の濫費の挿話は、結局季節祭に於けるかういふ神と人との間に行はれた狂熱的の亂舞饗宴、財産徒費、アメリカ印度人の言葉を借りて云へばゆる「ポトラチ」の印象と見て差支へないのである。

殷の紂王が武王に亡ぼされる時が二月とされ、殷の正月に當るのも決して偶然でなく、それが歳の變り目の祭と關係あることを示してをる。紂が鹿臺の上に登り、その珠玉をこうむり、自ら火に燒いて死すといふ挿話も天を祭つた郊祭の儀禮を想起せしむるものがあらう。

かう考へてくると、古代傳説が、如何に古代の神話的傳承の名残りを止め、季節祭の儀禮の印象と密接な關係あるものであるか、明瞭であらうと思ふ。要するにこれらの王者没落傳説は、會つて中國社會の指導者が一面呪術師的の役割を演じ、自然の運行の責任を負はされてをり、年の變り目の祭儀に於てその呪力更新を必要としたさまざまな行事の印象を止めてをり、其上に後に儒家の徒によつて道德的の分子が修飾附加されたものであり、たとひ荒唐無稽な説話とはいへその點に於て古代中國初期社會の一面を偲ばせるものありと云へる。

註記

本論文は東北大學東洋史教授故岡崎文夫氏の「華甲紀念論文集」の爲執筆したものであり、同論文集が弘文堂の都合により沙汰止みとなつたので、原稿が返附され、永い間筐底に眠つてをり、発表が遅れてゐたものであるが、最近たまたま九州大學の金關丈夫教授より「ニムロッドの矢」と云ふ抜刷の惠贈を受けたが、同小篇は「九州文學」第三號（一九五三年九月）に發表せられたものであり、同じく武乙の「射矢」傳説に對するマスpero教授の西方傳來説を駁し、その類例が日本にも印度にもあることを擧げられてをる。博士の御説は、此話の南來説を説かうとされてゐるのであり、自分の取扱ひ方は、少し角度が違ふので、此處に「史學」の紙面を借り、發表させて貰ふことにした。なほ、此論文起草當時開かれた第三回八學會聯合大會に於て之と同様の趣旨の講演をしたことがあり、その概要は、同大會の紀要である「人類科學、火」昭和廿五年 關書院の中に發表せられてをる。

註一 なほ慶應義塾望月基金支那研究會編「支那研究」三九九頁―四一五頁所載、同氏の同じ表題の講演筆記、及びその遺稿集三卷、*Etudes Historiques, Paris, 1950* 所載 *Influences occidentales en Chine avant les Han* を見よ。